

黄金のジュータンを敷く銀杏黄葉

小 関 栄

秋深し、大きな銀杏(いちよう)の樹から降りしきる落葉、一面に散り敷いた銀杏黄葉のジュータン、鮮やかな黄色一色、辺りは明るく眩しい。晩秋の風物詩だ。

銀杏の木は雌雄異株、春には雄花が沢山のおしべを穂状にし、雌花は細長い柄の先に二つづつの胚珠を付ける。これが盛夏に受粉して実になり、晩秋には熟して銀杏なって落葉より先に落下する。(写真は枝先部分の銀杏、7/末撮影)



日本名は木もその実(種子)も銀杏、銀杏と書く同字異音。

実を「ギンナン」と云うのは唐音 ginkgo の訛ったもので、木を「イチョウ」と云うは漢名の鴨脚 yajiao が訛ったものだが、「一葉」を仮名呼びしたという説もある。

元来、銀杏は中国原産、漢名の公孫樹 gongsunshu は銀杏の実になる期間が長く植えても実は孫の代になることからと云われている。また、漢名の鴨脚樹 yajiaoshu は葉の形が鴨の足形から、漢名の白果 baiguo は実が白い果実から名付けられている。



銀杏を拾い集めて、臭気のある皮を削ぎ硬い殻を割り、中の実を炒って茶わん蒸しや酒の肴にすると実に美味しい。

銀杏は大木になるので園芸よりも、街路樹や公園の木として親しまれている。東京では神宮外苑や丸の内中通りや日比谷公園に、また、横浜では日本大通りや山の手海岸通りの銀杏並木は壮観、晩秋に彩りを添えている。

(左の写真は掛川市の大日本報徳社の前庭の銀杏の大木。11/21 撮影)

銀杏を 拾う手許に 銀杏の葉 淡水

第13回水稲布マルチ直播栽培研究大会出席報告

頭書の大会が11月19、20日と大阪で開催された。花の村としても積極的に関わるべく、藤本が参加した。従来は作業技術的な面に終始していたが、津野先生の米収量増大理論を披瀝するまでステップアップしたと思われる。遺伝子組み換えの綿を不織布として使用しているため、有機の認証が得られていない問題について、津野先生から JAS 認証の必要性を疑問視する声も聞かれた。

技術的な問題として、深水栽培を避け、間断灌漑をうまく利用すべきとの意見が参考になった。はなの村から布マルチ普及マニュアルの原案を紹介してきた。

藤本記